

空の綾取り

電線は空の綾取り祖母の手より取りし簞や川やすぢ雲

たまこ

あの雲を取ってくれろと猫のいう遊び場なんだもつ往かなくちゃ

海月

夕雲に拍子木鳴らし防犯とご近所さんが井戸端をする

蘇生

「改革は男子の本懐」なんちゃって目を覚まさうね女小人は

真奈

寅さんと松陰同じ名前だね無鉄砲だね会って見たいね

海斗

美味きもの旬の河豚刺白子酒肴鉄砲さてもさてもや

蘇生

チバリヨの祈りよ届けひたすらに美味きものなど食ふは惜しかり

文枝

美味いものなどこの世には無いのだ祈る今のみ甘味溢れる

田所勉

美味きもの喰らふためにと人は生く一碗の水一挺の銃

海月

学校帰りに友と寄りあし「フランス」が今もあり窓に葉のそよぐこと

たまこ

本売って本を買ひし日身辺にたえてなかりき今の檻襪は

千種

言葉をばったひとつの武器として君に迫りし若き日の我よ

茉莉花

若き日のボーヴォワールはサルトルに哲学で負け文学に行ったとか

真奈

鮮明なる敗北感も勝利感もなく生きてきて鳴らす鳩笛

たまこ

親鸞もモーツァルトもいらざりきわが生のしんしんと餓えてこそあれ

花

煙草断ち貴様と一服するためさ櫻の下に案内をせいよ

海月

春立ちて桜の枝の黒々と脈じんじんと満つる様なり

蘇生

突きあぐるテーマ共生と創造なりディスク思へと駆りたてられり

れん

我が胸に風立てねやも今は春たのむからけつばね櫻見よ

海月

鞆帯は千切れんばかり春寒の風に昨日も明日も半旗

ほぼな

春浅き朝の光がたをやかに床の柱の裾を照らしぬ

蘇生

朝日さす床にゆうらり眠たさう私の息の詰まる風船

たまこ

縄文の女神のやつな胸ならび赤・青・白と飛ばす風船

真奈

屋久杉の脇芽を残しなに祈る山の民てふいまは何処に

海月

大揺れのなるに目覚めし春暁のなぜか待ち侘ぶ朝の光を

蘇生

飛び起きてニュース確かむ朝の地震胸襟正し今日の御言葉

文枝

なぬありて猫の不思議よ寝もやらで机の下に坐っていたよ

海月

錆び猫は錆びた階段に座つてゐる緑の大きな瞳だけ貴族のやうに

真奈

夫をみる眼差し胸に顔を埋める仕草まつたく猫に降参

たまこ

そつ言へば春立つ猫の声色を聞き初めたるはなるのその朝

蘇生

風花のモザイク模様には舞ひくれば春立ちしかと今朝の寒さよ

真奈

「ちぢよ、ちぢよ」糞虫は泣く風のむた揺るるばかりの一生なりせば

かわせみ

かざはなの ゆふらりゆらり あらはれて ちにおつさぎに きゆはまぼろし 海斗

風花のドブ板またぎマツカリを異国語と呑む裸電球

海月

折鶴のつばさを畳む夜となりて外の面静かに涅槃雪ふる

花

折鶴は白頭山かうスリーか夢に翔びゆく「お休み」の声

真奈

マタギてふ何処にもあり我が血にもデルスウザーラお休みなさい

海月

わが友よ心重くもある夜は『吉野紀行』を読んだらいかが？

花

早暁の成田の霞け散らして機首は北へとミラノへの旅

蘇生

水上の都市を思ふよバイトして信長が冬逃げる途なし

海月

貴種流離 いづべに熄まん積む雪に血潮のごとき朱実南天

かわせみ

毀るほど白くなりたる埋み火の朱の吐息の知るや爆ぜるを

真奈

かつて歌はきみを射る火矢心寄せ厭離さみしく焚火をかこむ

花

団塊の世代の者ら火を囲み背はだれともわからぬ暗さ

たまこ

老が居て若が居る春思います人は殺すなマッチも売った

海月

チャッカマン使へぬ人の空マッチ暖へ毛布の二重二重

文枝

この空のどこかで小さい子供たちマッチのやうな火を焚いてゐる

かわせみ

マッチ擦るつかの間の不安哨戒機禁じられたる小さき十字架

真奈

トレンチコートの修司の背そびらを想ひつつモカコーヒーはあくまで苦く

たまこ

春近く遠くもありて定まらずポットの茶葉がジャンピングしてる

花

修司とは青のジーンズサンダルよクリープのお湯割り飲んで春

海月

遠き日の叛旗顛ちくる雪の朝かこめかこめの幼き面輪

真奈

街灯の明かりを過ぎるぼたん雪過去世も暗し来世も暗し

たまこ

甘美なる夜の記憶の底にふるあれが終りの雪であったか

花

シチリアの夜の眠りより地を蹴りて踊るサテュロス甘きくびれよ

真奈

たとふれば夜の路地底溢れくるカストリ色の『晴れた空』なり

海月

夢の又夢も頼もし信實の白き輝き梅林を行く

丹仙

サン・ルイの雪のセーヌを上りゆく長き解が渦を残しつ

蘇生

思ひ出も未練も同じ色に染み流るる解歌ふわくら葉

真奈

わくら葉の浮つ沈みつ流れゆく花水川に冬の靄立つ

弁慶

水底にしつもる泥鰌に「春だよ」とくすべるやうなわくら葉の影

たまこ

ハンセンの患者残せし抱き人形生めざりし児に春を見させよ

真奈

去り行きし君に相模の紅白の梅の花咲く春を見せばや

弁慶

行着けぬ星のある家なんてかな口枝に梅咲き原付き取るふ

海月

名残雪降る足柄の関の跡紅き梅咲く春のあけぼの

弁慶

残雪に時を刻みてひと冬の層なす縞はバウムクーヘン

蘇生

地下鉄の階段登り見渡せば春の雪降る霞ヶ関かな

弁慶

二月堂の階登りゆく練行の僧の黒衣も滲むあは雪

かわせみ

網代木も絶えて久しき宇治川に淡雪の舞う雛祭りの朝

吊り雛の花やぎをみて出でくれば消残りし雪は黒く汚れつ

花

つるし雛金目の鯛も泳ぎをりつらつら椿の伊豆の山里

真奈

遠近の人訪れて仰ぎ見る伊豆の河津の桜満開

弁慶

絵島へのしるべの残る古道の小川にかかる大桜かな

蘇生

高遠の小彼岸桜咲きにけり江島の住みし庵の跡に

弁慶

忍ぶこひ忍ばざるこひ、こひがんの色にでにけり 忍ぶこひこそ

かわせみ

わがうちの杳き愛恋雪中のレンテンローズはうすくれないに

花

天平の香氣ひめたる二月堂大松明のくれないが散る

蘇生

くれないの桜花散る川筋の小道を行きしかの踊り子も

弁慶

こんにちは挨拶しをり吾あれもまたレンテンローズの薄紅に

海月

草の香と罪のにはひを引き連れてわたし無邪気なキンポウゲです

真奈

草の香がたてばたちまち無邪気にも白いマスクで艶をふせをり

蘇生

草の香のほかに香る望月の牧の跡にも犬ふぐり咲く

弁慶

そこここつぶくりきらきら蕎麦の里こころ紡ぎて友と行く道

文枝

友といて云つことなかなにもなく犬のふぐりをめつけたとだけ

海月

人はみな花の下へと集いゆくいぬのふぐりを踏みつけながら

花

いぬぶくり薄空色の小さき花土手一面に咲きにけるかな

弁慶

ぬまたばの闇を横切る灯がひとつ川土手をゆく人のあるらし

たまこ

「いぬぶくり」の歌反戦のうた戻らぬくにさん徳ぶ芝山

真奈

芝原の彼方に雪の富士見えて夕暮れ近き足柄の関

弁慶

朝焼けの富士に背を向け黙々と若布干しをり漁師老いたり

蘇生

さねさしの相模の原の朝焼けに君と出会いしあの日忘れず

弁慶

あのままになるのだろうか噴水は涸れてあたりき風の日なりき

たまこ

瓢箪池も無くなつて無数の友が死んだんだよね火が風巻めた

海月

嘶家のお内儀の建てし慰霊碑に三月十日忘れまじきと

真奈

「凧になったかあさん」ぼくはいまもなほ真つ赤な夢から逃れられない

かわせみ

隆よおまえのかあちゃん出べそだろごめんごめんほんとにごめん

海月

悲しきは焰降る夜の隅田川ともがら数多水漬く屍

弁慶

眼裏に三月十日の空の色川は下流へ下流へ海へ

文枝

母のなき六十年が過ぎてゆく忘れ雪いつしか消えてゆつぐれ

花

悪童もおちやっぴーもみな死にました宝物だっためんこびー玉

真奈

桃李和歌連作百首歌集

第六三〇一首より六四〇〇首迄

平成一七年二月六日より平成一七年三月十二日